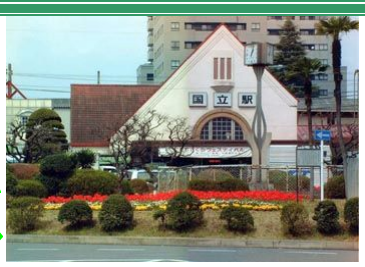
くにたち しらべ



NO. 6
発行日 2009　年　1 月 7 日
編集＝くにたち図書館地域資料ボランティア
発行＝くにたち中央図書館

『谷保天満宮』

図 1　概略位置

図 2　谷保天神社図会「江戸名所図会」より

1．谷保天満宮（谷保５２０９）

（関東三天神の一つ）

甲州街道、天神坂（てんじんさか）の南側、表参道から下に降りたところに、江戸時代関東の三天神として、湯島（ゆしま）・亀戸（かめいど）と並び称せられる谷保天満宮（やぼてんまんぐう）#1)があります。湯島・亀戸の２社が戦災にあい、すっかり近代化してしまっているのに対し、谷保天満宮は、古い社殿を保っている多摩の名社です。

（祭神）

祭神は菅原道真公（すがわらみちざね）#2)とその三男とされる三郎道武公（さぶろうみちたけ）を合祀（ごうし）しています。

太宰府に流され、妻子との別れに京の都を離れるときに詠んだ「東風（こち）吹かば　にほいおこせよ　梅の花　あるじなしとて　春な忘れるそ」は、有名な歌です。

（社殿の配置）

通常の神社は高台に鎮座（ちんざ）していますが、谷保天満宮のように下へ降りて行くのは珍しい配置です。昔の甲州街道は境内の南方、多摩川沿い、立川段丘ハケ下を通っていました。現在の、甲州街道は、江戸時代に五街道（東海道、中山道、奥州道中、日光道中、甲州道中）の一つとして、江戸日本橋を起点として整えられたため、南側に背を向けた配置となったものです。

（時代の推移）

江戸時代には朱印１３石五斗を寄せられ、谷保村の鎮守として、古くから谷保内外の信仰を集めて今日に至っています。現在は谷保天満宮という名称を用いていますが、古くは、単に天満宮とか天神社と呼ばれました。明治１４（１８８１）年には郷社に同１８（１８８５）年には県社に列せられ、三多摩が神奈川県から東京府に移管された明治２６（１８９３）年から第二次世界大戦末期までは府社として推移しました。

昭和２３（１９４８）年社務所新築、同２７（１９５２）年宝物庫改築、同４５（１９７０）年参集殿を新築しました。

正月には合格祈願や初もうでの人々、甲州街道を越えるほど大勢の行列となります。

（道真公と太宰府配流と北野天満宮の建立）

菅原道真公は、藤原時平らの讒言（ざんげん）によって、太宰府（だざいふ）に配流され、その地でその身に悲運を嘆きつつ亡くなりました。２年後延喜５（９０５）年に墓所の上に、神殿が作られ、今日の太宰府天満宮の起こりとされます。死後、天変地異が多く発生し、道真公の祟りとして恐れられ、村上天皇は、天暦（てんりゃく）元（９４７）年に、京都北野に道真公を祀（まつ）る天満大自在天神宮を建立しました。ほかに全国２２カ所の天満宮を加え命日２月２５日に祭祀を行わせました。北野の地の、農耕生活と結びついた素朴な天神雷神信仰#3)の基盤のうえに、道真公の怨霊（おんりょう）としての雷神の力が加わり、さらに平安中期以降、仏教思想と結びついて慈悲救済の神、儒家菅原氏の氏神として、学芸の神、文学の神として崇拝されるようになりました。

（津戸（つのと）三郎為守（ためもり）#4)「霊夢」による天神島からの遷座）

谷保天満宮は、養和元（１１８１）年に津戸（つのと）三郎為守（ためもり）が「吾が館より丑寅（うしとら）の隅にうつせ」という「霊夢」にしたがって、谷保田圃に続く本宿田圃の中州（なかす）#5)にある天神島（現府中市日新町のあたりとされ現在地より東南約 1Km です）にあった天満宮を現在の場所に遷座し、谷保天満宮の別当寺#6)安楽寺に子院六坊を建立して供養したと伝えられています。六坊の一つ滝乃坊が現在の滝の院とされ

図 3　谷保天満宮略図（「わが町国立」より）

ています。

（道真公の御神体）

菅公第三子、三郎道武公は、多摩郡分倍荘栗原郷（栗原郷は府中と現城山にかけての一帯でした）に配流され、津戸常陸掾平貞盛（一説には谷保県主#7）の津戸貞盛）の庇護のもとにあったと伝えられています。天神島というのは、道武公が、延喜３（９０３）年父君薨去の報を受け、思慕の情から父君を、偲んで彫った道真公の御神体を祀った場所といわれ、その像は衣冠束帯に身を固めた丈７５Cmほどの一刀彫りの座像です。三郎道武公の死後、三郎殿とよぶ祠が建てられたと伝えられています。

御神体の公開は、記録的には、明治３６（１９０３）年に行われた菅公一千年祭の折りに御開帳があり、一般に公開されただけで、以降は門外不出とされています。

（道武公と津戸三郎為守）

道武公と津戸三郎為守の関係については、次のように伝えられています。

道武公は、津戸貞盛の娘を娶り、男子が出生し、道英と名付けました。貞盛は、道英を長子修理太夫盛嗣の養子として迎え、道武公は菅原の姓を道英に与えました。この道英の六代目が、津戸三郎為守です。

（境内）

境内は約６，０００坪（約１９，８００㎡）、東方段丘上に約１，０００坪（約３，３００㎡）の梅林があります。

境内には、文学碑や記念碑が多く、常緑樹や梅林に囲まれています。境内の社叢は、緑の環境として国立市の重要な核の一つで、東京都指定の天然記念物となっています。

（山口瞳氏が書いた谷保天満宮と梅林）

国立市に住まわれた作家山口瞳氏は、その著「わが町」において次のように紹介しています。

図 4　梅林・東屋のベンチ

天満宮は、ハケの南端にある。その東側に梅林がある。

梅林からは水田地帯が見渡せる。その先に多摩川があり、前方の多摩の横山と直面することになる。ここが、この町でもっとも見晴らしのいい場所とされており、崖の上にベンチが置いてある。

辛夷や欅の大木がある。梅林から水田に降りる道には椿がある。わたしは、毎年、気になっていながら辛夷の花の真っ盛りに咲くところを見失っている。

水田地帯の中心を高速道路が東西に貫くようになった。多摩川の横山も各所で整地が行われて、山肌が赤く白くなっている。古い土地であっても、眺望が変わってきている。

１）**本殿**（市指定有形文化財・建造物）　「天満宮略縁記」によれば、最初に造営されたのは村上天皇の天暦元（９４６）年とあります。

寛永年間（１６２４～４４）に改築されたものです。三間社流造(ながれづくり)#8)で寛延２（１７４９）年に上谷保村の佐伯原七により建築されました。桁間三間（５．４ｍ）、梁間二間（３．６ｍ）、６坪（約２０㎡）の母屋の前に一間通りの庇(ひさし)をつけたものです。

図 5　本殿

屋根は母屋の切妻造#9)がのびて庇に続き、長く緩やかに流れるような曲線となり、ここから流造の名が起こっています。概観は、彩色調査の結果、東照宮のようにきらびやかな極彩色が施されていたことが分かりました。

２）**拝殿**　（市指定有形文化財・建造物）拝殿は、入母屋造り#10)２２坪（約７３㎡）で、嘉永４（１８５１）年に建築されたと考えられています。昭和４８年屋根を改修しました。

図 6　拝殿

３）**三郎殿**　三郎殿は当初社殿の奥にありましたが、火災により焼失して、現在は社殿の裏に石祠(いしほこら)として残っています。文化１３（１８１６）年再建し、元の三郎殿には、現在社殿に御神体として菅公像と共に安置されている道武公の尊像（寄せ木造、衣冠束帯の木像で高さ約６０Cm）が、合祀(ごうし)されていたと云われます。石祠には、注連縄(しめなわ)が回され、中に幣束#11)が入っています。

図 7　三郎殿

４）**常盤の清水・弁天池**　境内一帯は、かっては、各所から清水が湧き、水の豊富な地域でした。延宝年間（１６７３～１６８０）に筑紫の僧が谷保天満宮に詣でた折、この泉をみて「とことこと湧ける泉のいやさやに　神の宮居の瑞垣(みずがき)となせり」と詠みました。これが「常盤の清水」の名の起こりだと伝えられております

図 8　弁天池と厳島神社

神社の裏門出口の端に小さな池があり、その中央に厳島神社という弁財天を祀った小社があります。

この源泉から流れ出た清水は、弁天池を満たし、更に細い流れをつくって谷保天満宮境内の西側を南方に下っています。昭和１５（１９４０）年頃までは下流に水車小屋があり、農家の精穀用

に供されていました。(*5P123,*48P31))

5）**第六天神**　谷保天満宮境内、天神坂上の梅林北方に「第六天神」の祠（ほこら）があります。祭神は、面足尊（おもたるのみこと）と煌根尊（かしこねみこと）の二神で、これが古事記に出てくる神代の第六番目の神であることから第六天神の名があります。(*27)

6）**梅林**　境内には、紅白約３００本の梅林（香雪園）があり、毎年梅祭（うめまつり）が開催催されています。梅の花は谷保天満宮の社紋でもあります。

7）**社宝**　主な社宝には、後宇多天皇の勅により建治元（１２７５）年に藤原経朝（ふじわらつねとも）によって書かれた「天満宮」扁額（へんがく）#12)や鎌倉後期の作と推定される１対の木造彫刻の狛犬（こまいぬ）#13)が所蔵されています。いずれも国の重要文化財に指定されています。元禄年間には、水戸光圀が参拝し、模刻した「扁額」を奉納しています。

図 9　扁額と狛犬（谷保天満宮蔵）

8）**行事**　主な行事としては、1月１日の元旦祭を始めとして、1月２５日（初天神）の筆供養、9月の例大祭、11月３日の庭燎祭（ていりょう）（おかがら火）等があります。例大祭には、市指定無形民俗文化財の古式獅子舞が奉納されます。

①おかがら火　道真公の像を遷座した養和元（１１８１）年１１月３日、境内で社殿造営の残木を焚いたという故事を、氏子信者たちは、伝えています。

上谷保地区と下谷保地区の二手に分かれ、双方うず高く積み上げた粗朶（そだ）やマキを燃やして、上に置いた三把（さんば）のマキを台座とした幣束が早く落ちたほうが負けとなります。このおかがら火は、府中の大国魂神社（おおくにたま）の暗闇祭（くらやみ）とともに、関東の奇祭といわれています。

図 10　おかがら火(*47)

②獅子舞　毎年９月２５日近くの土曜、日曜に行われる例大祭には、伝統芸能である、「古式獅子舞」が、獅子舞保存会の人々によって奉納されます。１０００年以上の歴史があります。

これは、大頭、子頭、雌獅子の三頭の獅子に天狗が加わって、約１時間舞います。伴奏として、横笛の合奏と獅子舞唄の斉唱があります。

図 11　獅子舞(*47)

この舞に使われる獅子３体は、天暦３（９４９）年村上天皇より下賜（かし）されたと伝えられています。

獅子舞（ししまい）は、市指定無形民俗文化財です。

③獅子宿　舞人は、かっては、上谷保からは加わらず、原則として、下谷保、坂下両地区からの住民から選出されました。現在は、希望があれば四軒在家と中平からも加わっています。公演十日程前に、天満宮宝物殿より獅子頭を出し、これを、数百年前から下谷保地区の旧家佐藤家（俗に“獅子伝さん”と呼ばれています）に移し、同家の庭で毎夜猛練習が続けられました。

大祭当日は、獅子宿の庭で勢揃いして、同家を立出、甲州街道を西へ、六丁あまりある天満宮に向かって行列が進められます。これを「道行（みちゆき）」と称していました。

昭和４０（１９６５）年に、甲州街道の交通が激しくなり「道行」が困難となったことと、結婚式場の参集殿も建設されたので、昔の通り、稽古は、天満宮参集殿で行われことになりました。(*28、45,46)

９）境内にある自然(*22,23,24)

谷保天満宮は地形上、青柳段丘と立川段丘の合流地点に位置しており、シラカシ群集ケヤキ亜群集の樹林がまとまっています。その他スギ、ヒノキ植林や植栽樹群モウソウ竹林があります。植物も豊富で、梅林周辺には特にスミレが多い。境内には昭和 30 年頃まで、杉の古木がうっそうと茂っていましたが、甲州街道に面しているため自動車の排気ガスの影響および地下水位の低下などが原因で杉の枯死を招き、生死が危ぶまれている状態にあります。しかし常緑のシラカシ、カヤ等、落葉のケヤキ、ムクノキ、コブシ等の古木・高木が多く、歴史の古い土地柄をしのばせます。

①巨木　巨木も多く、市内でも大木の生育地として１０指に入ります。梅林にあるケヤキは目通り周４．５８ｍで単木では市内第２位の大きさです。他にクスノキ、イチョウなどの巨木もあります（1位は城山にあり４．６８ｍ、１９８９年調査時点）。

②高等植物　１９７０年調査では、大本類 84 種、草本類 325 種・シダ 10 種など４１９種と多様にありました。特に西北部の社叢と、梅林下のハケはアズマネザサやつる植物が多く日本古来の野草の、貴重な宝庫でした。植物相も日本古来から伝わる植物によって群落が作られていましたが、現在は、立地の乾燥化や帰化植物の侵入などで一部の種、イラクサ、ヤブミョウガ、ヤマギイノコズチといった野草類が姿を消しました。

１０）境内にある碑(*17)

①　清原元輔歌碑　境内左手第六天神の脇にあります。「わが宿の千世のかわ竹ふし遠みさも行く末の遥なるかな」と彫られています。菅公の子孫に当たる菅原以長が、書いたものを、天保１２（１８４１）)

年に石坂実福の門人が建立しました。清原元輔は、「枕の草紙」を書いた、清少納言の父親です。

② 競技場改修記念碑　神社前の改修記念碑は、かって梅林が下谷保青年団の陸上競技場であった頃のものです。昭和１１（１９３６）年に建立。

③ 和魂漢才碑　梅林を入って左手の小高い所にあり、黒花崗岩の大きく立派なものです。菅公１０７５年大祭奉賀事業の１つとして、昭和５２（１９７７）年に建立されました。和魂漢才の文字は、菅公の裔孫（えいそん）太宰府天満宮宮西高辻信貞氏の揮毫によるもので、五角形の台石には、菅公御遺戒が彫られています。

④ 孝林道人詩碑　梅林の中央手前にある詩碑で、上部に「詠菅廟梅」と題し、「東風二月廟前梅　恰似羅浮香謁堆　若就林間為酔臥　美人必入夢中来　孝林道人　」の七言絶句、下部には、孝林道人の略歴と建碑理由が彫られている。孝林道人は南養寺２２世孝林碩慶です。安政５（１８５８）年頃に建立。

⑤ うたた句碑　不老軒転（うたた）の「空に香の満てや□（梅）に日の匂ふ」が彫られています。うたたは郷地村（現拝島市）の人で、文化文政年間の戯作者。蜀山人と交遊あり俳句もよくしました。本名を宮崎伊八といい、嘉永６（１８５３）年９４歳で没しました。

⑥ 原田重久句碑　梅林の奥に、原田重久の句碑「風落ちて青田の秩序戻りけり」があります。戦争で吹き荒れたあと、戦後田園が静けさを取り戻したことを詠ったものです。原田重久は明治３４（１９０１）年　谷保村に生まれ、書家本田石庵（定寿）に漢籍書道を学びました。ＮＨＫ専属放送作家として活躍。又郷土史家として『国立風土記』『わが町国立』を著し、昭和６０（１９８５）年、８４歳で没しました。この碑は生前１９８１年に山口瞳、関頑亭らが発起人となって建てました。

⑦ 山口瞳文学碑　毎年梅の咲く頃に、知人と宴を催した場所に、平成９（１９９７）年に関頑亨が世話人となり、関敏が制作しました。台座の地に根ざした不動の山と将来を見通せる窓としての目を表現しています。谷保天満宮の祭りを描写した『週刊新潮』に連載されたエッセイ「男性自身」の「祭り」の一節「金棒、拍子木、笛が鳴り、万燈を先頭にした獅子舞の道行は近づいてくる、体が天に浮く心地がする、夕方になって豪雨が襲う、神殿で神楽が続いている、あたりが暗くなる、太鼓と笛、ゆるやかに荘重に軽快に」が彫られています。(*17・P18)

図 12　山口瞳文学碑

⑧　台臨記念碑　梅林の奥右手にあります。明治４１（１９０８）年８月１日、有栖川宮威仁親王の呼びかけで、日本で初めてガソリン自動車（タクリー号）のドライブツアー「遠乗会」が日比谷公園から甲州街道の立川を目的地にして行われました。

図 13　台臨記念碑

　折り返し谷保天満宮で、交通安全を祈願して参拝された後、梅林で立食しました。その記念として親王の台臨記念碑を建てました。2008 年８月１日、１００周年にちなんで昼食会を再現しました。同年１２月７日には遠乗り会を再現したクラシックカーのパレードが行われました。(*43)

⑨　顕徳碑　梅林入口にある。府中商人組合谷保支部幹部の顕徳碑で、趣旨と芳名が彫られ、昭和１１（１９３６）年の建立です。

⑩　谷保天満宮の座牛　参道石段の下にある。菅公葬送のとき、悲しみ動かなくなった牛車の牛を現します。昭和４８（１９７３）年関敏の作です。

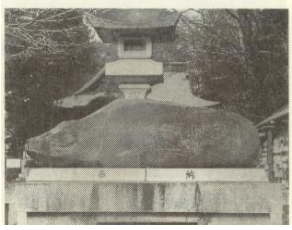


図１４　座牛

⑪　慰霊碑　社殿の右手斜面にあります。正面には「慰霊碑　本田定弘書」裏面には国立町の戦争犠牲者２９２名の名前と「人間がたがいに信じあい愛しあうこころの花束をつつしんでここにささげる」が彫られ、昭和３１（１９５６）年の建立です。

⑫　彰功碑　社務所に並んで建っています。正面には日露戦争における谷保村従軍者５６名の彰功文が、本田定年の撰文と書で彫られています。篆額（てんがく）の「彰功」は乃木希典の書です。裏面には戦死者３名、病死者５名と凱旋者４８名の氏名が彫られています。明治３９（１９０６）年に建立。国立市内の戦争関係碑は、前記慰霊碑と二つです。

⑬　菅公千年祭碑　彰功碑と並んで建っています。明治３５（１９０２）年は、菅公が延喜３（９０３）年薨去（こうきょ）されてから千年。その記念として建立されました。

⑭　筆塚　谷保天満宮神社南側にあります。明治２４（１８９１）年に谷保、青柳、四谷（現在は府中市）の小学生が、使い古した筆を納めて供養し、建立しました。1 月 25 日道真公の命日（初天神）に、筆供養が行われます。道真公は平安時代、空海、小野道風と共に三筆といわれた能書家でした。

２．清水の茶屋跡　（跡地　谷保５８２７－１）

谷保天満宮の近く、北西の方向、天神坂下に「清水の茶屋」という立場茶屋がありました。このあたりは、谷保随一の湧水池で、夏ともなると、そばやそうめんを清水にひたして、炎天下の甲州街道を旅する人々に大変珍重されたようです。

図 15　清水の茶屋跡　現況と「江戸名所図会」

一里ほど手前の府中の宿場を出ると日野宿まで二里八町（約８，６００ｍ）の途中で多摩川を渡ります。この間でお茶を飲めるところはここだけでした。明治末期まで営業を続けていました。当時の様子は『江戸名所図会』に描かれています。

３．仮屋あと（谷保５８１４先）

建治元（１２７５）年、谷保天満宮に扁額#12) を奉納するため、勅使が京都から下向した際、仮の宿を設けたところからこのあたりを「かりやうえ」と呼び、南側の甲州街道の天神坂をおりきったところに出る、坂下と千丑の境の、坂道を「かりやざか（仮家坂）と呼ぶようになったと言われています（江戸名所図会）。この額は、世尊寺流#14 の書道の祖世尊寺朝臣経朝書とあり、重要文化財に指定されています。（新編武蔵風土記稿巻乃九一一）

図 16　かりやざか

４．滝の院（谷保５２１７）

谷保天満宮の裏方、甲州街道坂下地域の北側にあります。天満宮の別当寺安楽寺の中六坊の一つで、もとは「滝本坊」といいました。２０００年に堂が取り壊され、現在は無住寺となっています。墓地は千丑、坂下、下谷保各地区の世話人により管理されています。

図 17　滝の院

（血文（ちぶみ）の阿弥陀#25) ）

滝の院にあった阿弥陀如来#26)座像は、法然上人および津戸三郎為守ゆかりの仏像との伝承で『新編武蔵風土記』や『武蔵名勝図会』などに記載されている「血文（ちぶみ）の阿弥陀」#4)で、現在は谷保天満宮に保管されています。これにまつわる石塔として「津戸三郎為守血文之阿弥陀

図 18　血文の阿弥陀と石塔

如来法然上人作」と刻まれた石塔が建てられています。高さ１．５ｍ、上部に小さく定印の阿弥陀如来座像が浮き彫りされています。

ほかに次の墓、塔があります。

１）「谷保案内」を書いた、遠藤由晴#15)の墓が、基地の中央、住職墓地の手前にあります。

２）国立最古像塔　住職墓地の右側中央にある光背型の墓塔です。墓塔には、寛永１９（１６４２）年と示寂年が彫られていますが、国立で最も古い造立と思われます。(示寂:菩薩または高僧の死)

５．安楽寺　（跡地　谷保５８１２周辺　現存せず）

安楽寺は梅香山松寿院安楽寺と称され、天台宗深大寺の末寺#16)でした。徳川時代には、ご朱印社領１３石余り、社地９００坪（約３，０００㎡）でした。

（安楽寺六坊）

安楽寺六坊は、次の６つです。

尊住坊　第１小学校入口正面、三田氏の屋敷に六地蔵がありました。

邑盛坊　石神宮のあと。庚申塚、馬頭観音などがありました。

梅本坊　坂下にありました。南北朝期から室町中期頃までの板碑などがありました。

桜井坊　天神坂中段南側にありました。

滝本坊　現滝の院。谷保天満宮北側にあります。

松本坊　現府中市西府本宿に接続する「本宿原」の渡辺屋敷に地蔵がありましたが、国道回収により滝の院に移しました。

図 19 安楽寺六坊配置図（関保寿家文書「撫梅」）より

（開山と場所）

「安楽寺記」等の寺伝記録によれば、菅原道武公が大宰府の安楽寺を模して寺を建立し、道真公の像を安置したことにはじまり、天暦元（９４７）年に法円が開山したとされています。しかし、深大寺末寺西光寺の過去帳には、別記載がありその開山についての詳細は不明です。養和元（１１８１）年、津戸三郎為守が天満天神社を天神島から現在の地に遷座したときに、同時に別当寺として祭祀をつかさどるために社務六院（六坊）を置いて祝典その他を津戸三郎為守が統括しました。安楽寺は、滝の院の西方一丁、谷保天満宮に西北方一丁半の千丑坂下の中央部丘状に移したと伝えられています。また谷保天満宮境内常盤清水の傍らにあったともいわれています。

（本尊と阿弥陀#25) 如来像#26)）

津戸三郎為守は、建久６（１１９５）年に法然*17)上人のもとで出家しました。本尊は、京都黒谷の法然上人から贈られたと言われる高さ約４５Cm木造の阿弥陀如来像で、いわゆる津戸三郎為守の血文阿弥陀如来像です。

その後安楽寺は衰退の一路を辿（たど）りました。同時に六坊も一つ二つと消えていって、寛永の頃になると、四坊を残すのみとなりました。

（再興と火災）　禰宣

安楽寺が再興されたのは、この寛永年中のことです。当時の住僧は権大僧都圓和尚と言われました。僧圓戒は江戸小石川の人で、谷保にきて安楽寺の住職となりました。

「谷保案内」を書いた遠藤由晴は、この安楽寺住僧権僧都圓戒の一番弟子でした。

寛文・貞享の頃は、権僧都裕盛という人が住職となり共に安楽寺再興のために力をつくしました。

「江戸名所図会」などによるとその後江戸時代の火災で失われ再建されませんでした。

江戸の町に天満宮の出開帳（でかいちょう）#18)を行い、多くの信者を作ったのは安永年中のことで、この時の安楽寺主住は慧澄和尚と言われました。

この頃六坊は滝本坊のみとなってしまいました。安楽寺には寺子屋が開かれていて、これが村の子弟の唯一の教育機関でもありました。

（神仏分離令による廃寺）

神仏分離令#19)により、明治元（１８６８）年９月に安楽寺最後の住職秀影は還俗して津戸監物と名乗り、谷保天満宮の初代住職となりました。安楽寺及び滝の院以外坊は、明治６（１８７３）年ごろ廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）#20)により取り壊され、今は存在していません。安楽寺の本地堂も明治９（１８７６）年ごろに壊されて、安楽寺や本地堂の本尊などは滝の院に移されました。

語句の説明・解説　（＊数字は、引用文献を示す）

＃１　天満宮【てんまんぐう】　別に、天神社・老松社・北野神社などとも呼ぶ。天満天神菅原道真を祀る神社。延喜 5(905)年創建の太宰府天満宮,天暦元(947)年創建の北野天満宮をはじめ全国各地にあり,その数は１万をこえるといわれる。平安時代,道真の縁故地などに勧請され,天神信仰の広がりとともに各地に天満宮が創建･勧請された。(*12)

＃２　菅原道真【すがわらのみちざね】　承和 12 年 - 延喜 3.2.25(845 - 903)年菅原是善(これよし)の子。文章生から出身し宇多天皇の信任を得て,寛平 3(891)年蔵人頭,893 年参議となり,896 年娘の衍子が女御となる。昌泰 2(899)年)醍醐天皇のもとで藤原時平が左大臣に,道真が右大臣となる。時平による藤原氏の権力確立の策略により,延喜元(901)年自らの娘を室に入れていた斉世(ときよ)親王(醍醐の弟)を天皇に即け醍醐天皇を廃する企てをしたとして大宰帥に左遷され,任地で没した。909 年時平が没し,延長元(923)年皇太子保明親王が没すると,道真霊魂の宿忿によるとされ,右大臣に復し正二位を贈られた。925 年時平の外孫皇太子慶頼王が没し,930 年に内裏の落雷で大納言藤原清貫が死亡。これらは道真の怨霊の仕業と考えられ,天満大自在天神として安楽寺(太宰府天満宮)に祀られ,洛北の北野天満宮にも祀られた。正暦 4(993)年贈太政大臣。当代随一の文章道の学者として,900 年詩文集「菅家文草」を醍醐天皇に献じ,大宰府でも「菅家後集」を撰する。「日本三代実録」編纂に携わり,「類聚国史」を自撰。天神は怨霊･雷神として怖れられる一方,和歌･書道･学問の神ともなり,禅僧にも渡唐天神として信仰された(天神信仰)。近世には民衆にも信仰され,浄瑠璃「菅原伝授手習鑑」も創られた。(*12)

＃３　天神信仰【てんじんしんこう】天満(大自在)天神として神格化された菅原道真に対する信仰。道真の没後間もなく,天変地異が相つぎ、御霊(ごりょう)信仰の広がりを背景に,その祟りと恐れられた。道真の霊は,雷神信仰とも結びつきながら神格化され,北野天満宮を中心に各地で祀られたが,神格は次第に変容をとげ,文道の祖神と崇められたほか,書道の神,極楽往生を擁護する神,至誠の神など多様な性格をもつに至り,広く信仰されて,各方面に多大な影響を及ぼした。(*12)

＃４　津戸三郎為守【つのとさぶろうためもり】　1163～1243　鎌倉時代前期の武士、御家人。菅原孝標(たかすえ)の孫津戸為光の子。石橋山の合戦の折に源頼朝の陣営に参加して力を得、谷保の城山へ館を構えたという。為守は農民たちが三朗伝説を語り伝えながら、篤く信仰していた天神社と別当寺の安楽寺を谷保の地へ遷座し、その宗教的権威によって、所領支配を確かにしようとしたのであろう。頼朝が東大寺供養に供奉（ぐぶ）して上洛した建久 6(1195)年に法然により帰依した。法名は尊願。熊谷直実とならんで源空（法然）の根本の弟子と称され、谷保に帰ってからも、一心不乱に念仏修行を行った。仁治 3(1242)年 11 月の如法念仏の結願日に割腹し翌寛元(1243)年に往生したという。孫は代々谷保天満宮の神官職をつとめている。墓は八王子大善寺にある。(*1)
＜血文阿弥陀如来像の伝聞＞谷保天満宮安楽寺旧記によれば、法然上人が、為守の志をうけて阿弥陀の尊像を彫み、その胎内に、己の血を以って書いた所謂「血文」なるものを蔵すとある。また「法然上人行状伝記」には、尊顔為守が、腹を切った血にて故郷の妻子に贈ったという血文については、伝聞には見当たらず、安楽寺に伝わる土俗の説には信をおくことができないと。と書かれている。(*3)

＃５　中州【なかす】川の中で、水面にでていて島状の地のこと。

＃６　別当寺【べっとうじ】神仏習合説に基づいて神社に設けられた神宮寺の一。(*11)

＃７　県主【あがたぬし】大和時代の県の支配者

＃８　流造【ながれ‐づくり】神社本殿の形式の一。切妻造平入りの屋根に反りを付し、その前流れを長くして向拝としたもの。平安前期より起り、賀茂御祖神社・賀茂別雷神社の本殿の形式。全国に広く分布。(*11)

＃９　切妻屋根【きりづま‐やね】棟を界として両方に流れを持つ、書物を半ば開いて伏せた形。(*11)

＃10　入母屋【いりもや】上部は切妻のように２方へ勾配を有し、下部は寄棟造のように４方へ勾配を有する屋根形。(*11)

＃11　幣【へい】神への捧げ物。ぬさ。幣は神などに捧げる帛(絹)という意味で,延喜式には祭祀ごとに幣物として布帛,武器･農具,酒･魚貝･海藻などが規定されているが,幣物の中心となるのは絁･糸･布･木綿などの布帛類。元来自分にとって大事なものを神に捧げていたのであるが,布帛の材料となる繊維がとくに重視され,榊に木綿や麻を垂らした。やがて布帛を串に挟んだり,後には木に紙垂を垂らす形となり,御幣と称するようになった。(*12)

＃12　扁額【へんがく】門戸・室内などにかける細長い額。（＊11）

＃13　狛犬【こまいぬ】(高麗犬の意) 神社の社頭や社殿の前に据え置かれる一対の獅子に似た獣の像。魔よけのためといい、昔は宮中の門扉・几帳・屏風などの動揺するのをとめるためにも用いた。こま。(*11)

＃14　世尊寺流【せそんじりゅう】藤原行成に始まる書風の流れ。行成の建てた世尊寺を,鎌倉時代に出た行能が家名にしたところからの命名。平安時代には藤原伊房･定実･定信などが出,鎌倉時代の経朝により確立。和様で個性に溢れた書として書の道の中心にあり,室町時代まで繁栄を誇った。(*12)

＃15　遠藤由晴【えんどうよしはる】　宝暦９（１７５９）年谷保千丑の生まれ、長じて遠藤宗五郎由晴と名乗り、吟松斉と号した。幼少から書をよくし、文章詩歌に通じ、後年「谷保案内」を著した。

「谷保案内」は上下２巻からなり、江戸時代の谷保村の様子を七五調で綴った江戸時代末期に寺子屋でもっとも重用された教科書である。(*4)

＃16　末寺【まつじ】　本山の支配のもとにある寺。

＃17　法然【ほうねん】　長承２‐建暦 2.1.25(1133-1212)年) 浄土宗の開祖。諱は源空。父は美作国久米の押領使,漆間時国。夜討で父を亡くして出家,15 歳で比叡山に登って源光･皇円らに師事。1150(久安 6)遁世して,黒谷別所の叡空のもとで浄土教を学び円頓戒を受けた。南都遊学の後,安元(1175)年に唐の善導の「観経疏」により回心し浄土宗を開く。文治２(1186)年の大原問答で注目され,建久元(1190)年には重源の要請で東大寺で講説,称名念仏が弥陀に選択された唯一の往生行である,との選択本願念仏説を披瀝(専修念仏)。建久９(1198)年に九条兼実の要請によって「選択本願念仏集」を撰述したが,社会的反響の大きさもあって旧仏教から敵視された。元久元(1204)年には延暦寺が,翌年には興福寺が専修念仏禁止を上奏。建永２(1207)年２月に専修念仏禁止令が発布され弟子４名が死刑,法然も土佐に流罪となった(建永法難)。同 12 月に赦免され摂津勝尾寺に寄寓,建暦元(1211)年 11 月帰洛を許され,翌年東山大谷の住坊で没した。弟子には幸西･親鸞･証空･隆寛･聖光･長西らがいる。主著「選択本願念仏集」「一枚起請文」。(*12)

＃18　出開帳【でかいちょう】本尊など仏像類を他所へ出して公開すること。時候のよい春に行うことが多い。(*11)

＃19　神仏分離令【しんぶつぶんりれい】王政復古･祭政一致の理念にもとづいて,奈良時代以来の神仏

習合・神仏混淆を禁止し，神社からの仏教色の排除を命じた，明治初年の一連の行政措置（法令）。慶応 4（1868）/明治元（1868）年. 3. 17，神社の別当・社僧に還俗を命じ，3. 28，権現などの仏語を神号に用いることや，神社での仏像・仏具の使用を禁止した（神仏判然令）。これらの法令は近世の儒学・国学の復古思想や排仏思想の高まりを背景とするため，神職や国学者や地方官の間で廃仏毀釈の行動が激化し，中央政府が排仏を諫めたにも関わらず多くの寺院が破壊された。（*12）

＃20　廃仏毀釈【はいぶつきしゃく】排仏毀釈とも書く。明治初期の神仏分離令，神道国教化政策を契機に全国各地で行われた仏教排斥運動。近世の儒学者・国学者の排仏論や儒学経世論，財政逼迫を背景とした水戸藩などの寺院整理を淵源とする。神職・国学者や地方官によって指導され，神社の仏教的事物の棄却や，合併・廃止などによる寺院の削減が行われた。その結果，排仏を諫める中央政府の布告にも関わらず，多くの寺院，仏像・仏具・仏典などが破却された。廃仏毀釈は仏教界に改革を促し，護法運動や教団近代化運動を惹起した。また，各地で真宗僧侶や門徒による一揆（大浜騒動・越前真宗護法一揆など）も発生した。（*12）

＃21　江戸名所図会　江戸時代後期に刊行した江戸の地誌。7 巻 20 冊。長谷川雪旦の挿図も有名。前半 1-3 巻（10 冊）は 1834 年、残り 4-7 巻は 1836 年に刊行された（全 7 巻 20 冊）。日本橋から始まり、江戸の各町について由来や名所案内を記し、近郊の武蔵野、川崎、大宮、船橋などにも筆が及んでいる。江戸の町についての一級資料である。

＃22　新編武蔵風土記稿　間宮士信らが徳川幕府の命によって編纂した武蔵国の地誌。全部で 265 巻からなり、文化 7（1810）年から文政１１（1828）年にかけて完成。

＃23　武蔵名勝図会　八王子千人同心出身の植田孟縉（うえだもうしん）が書いた多摩郡１２巻の武蔵野を紹介した本。文永 3(1820)年に完成した。

＃24　法然上人伝記【ほうねんしょうにんでんき】著者未詳。鎌倉時代成立とみられ，現存する最古の法然伝。醍醐寺蔵。全 6 編。このうち 4 編についてはほぼ同じものが「西方指南抄」「拾遺語灯録」「和語灯録」等に収録されている。第 3 編〈三心料簡および法語〉の末尾に悪人正機説が記され，この部分が果して法然の言行と考えうるか否か論議をよんできた。（*12）

#25　阿弥陀【あみだ】（梵語 Amitaayus は無量寿、Amitaabha は無量光と漢訳）〔仏〕西方にある極楽世界を主宰するという仏。法蔵菩薩として修行していた過去久遠の昔、衆生救済のため四十八願を発し、成就して阿弥陀仏となったという。その第十八願は、念仏を修する衆生は極楽浄土に往生できると説く。浄土宗・浄土真宗などの本尊。阿弥陀仏。阿弥陀如来。略して弥陀。無量寿（仏）。無量光（仏）。(*11)

#26　如来【にょらい】（梵語 tathaagata　多陀阿伽陀）仏十号（ぶつじゆうごう）の一。仏の尊称。「かくの如く行ける人」、すなわち、修行を完成し、悟りを開いた人の意。のちに、「かくの如く来れる人」、すなわち、真理の世界から衆生救済のために迷界に来た人と解し、如来と訳す。(*11)

出典／参考資料　（[　]内は　国立市中央図書館図書記号、（　）内は公民館図書記号）

１）くにたちの歴史　編纂　国立市　平成７（１９９５）年　［１０／B1］

２）国立市史　編纂　国立市　昭和６３（１９８８）年～平成４（１９９２）年　［１０／B1］

３）国立歳時記　原田重久　昭和４４（１９６９）年　［１０／Ｂ１］

４）くにたち歴史探訪ガイドブック　改訂版　平成１６(２００４)年［１０／Ｃ６］

５）国立風土記　原田重久　迷水亭書屋　昭和４２(１９６７)年［１０／Ｂ１］

６）日本の神仏の辞典　大島建彦他　大修館　２００１年［Ｒ１６２］

７）日本歴史大系１３（東京都の地名）　平凡社　２００２年［Ｒ２９１］

８）国史大辞典１３　吉川弘文館　１９９２年［Ｒ２９１］

９）日本人物文献目録　法政大学文学部史学研究室　１９７４年［Ｒ２８１］

10）日本人名大事典　平凡社　１９３８年［Ｒ２８１］

11）広辞苑第６版　三省堂　２００８年［Ｒ８１３］

12）岩波日本史辞典　岩波書店　１９９９年［Ｒ２１０］

13）多摩ら／び　2002No.20　スケッチで見る谷保風景　関敏　けやき出版　2002 年[０２／Ａ５]

14）神社名鑑　神社本庁　１９６３年［Ｒ１７５］

15）総合佛教大辞典　法蔵館　２００５年［Ｒ１８０］

16）日本仏教史辞典　今泉淑夫他　吉川弘文館　１９９９年［Ｒ１８２］

17）くにたちの石造物を歩く　国立市教育委員会　１９９９年　［１０／Ｄ８］、（Ｋ２１８）

18）江戸名所図会　市古夏生、鈴木健一　校訂　ちくま学芸文庫　１９９６年　［０１／Ｂ５］

江戸名所図会　鈴木宗之、朝倉治彦　校註　角川文庫　昭和４２(１９６７)年　［０１／Ｂ５］

江戸名所図会　元寸復刻版　石川英輔、田中裕子　評論社　１９９６年　［０１／Ｂ５］

巻の三に　谷保天満宮、常盤の清水、菅原道武朝臣旧館の地、仮屋坂、梅香山安楽寺の絵と説明あり。

19）江戸名所図会を読む　川田壽　東京堂出版、　１９９０年　［０１／Ｃ２」

19-1)続江戸名所図会を読む　川田壽　東京堂出版、　１９９５年　［０１／Ｃ２」

19-2)近郷散策　江戸名所図を歩く　川田壽　東京堂出版　１９９７年　［０１／Ｃ２］

20）谷保天満宮所蔵文書　Ｉ　昭和６１（１９８６）年調査　国立市地域史料叢書第９集　（Ｋ２）

谷保天満宮所蔵の文書目録の一覧と史料２５点について解説を付している。

主な史料は、安楽寺記、津戸三郎為盛系図、谷保天満宮略縁記

21）ぶらり日本名作の旅　日本テレビ放送網株式会社　１９８８年　［１０／Ｃ２］、（ＫＳ９１０）

山口瞳の「居酒屋兆治」の一部、天神様の由来、おかがら火が紹介されている。

22）くにたちの野草いろいろ　国立市教育委員会　１９７９年　「１０／Ｑ７」、（Ｋ４１２）

22-1)くにたちみどりの交響楽　国立市教育委員会　１９９０年　［１０／Ｑ７］

23）国立の大木　国立市大木調査報告書　１９９０年　［１０／Ｑ７］、（Ｋ４７２）

24）国立の植生　国立市植生調査報告書　曽根伸典　１９８０年　［１０／Ｑ７］、（Ｋ４７２）

現存する植物群落の保全のための調査報告書

25）記録する会『谷保のむかしをさぐる－天満宮／城山／津戸三郎』　国立市公民館　１９８３年［１０／Ｂ４］

26）日本歴史叢書１９　天満宮　竹内秀雄　吉川弘文館　１９６８年　［－］、（２１１）

諸国の天満宮として、谷保天満宮は、延期年間(902～922)、菅公の三子道武の創建と伝えている。

27）わが町国立　原田重久　迷水亭書屋　昭和５０（１９９５）年　［１０／Ｂ１］
「国立風土記」、「国立歳事記」の一部再録、訂正と新事項が加わった。
28）谷保天満宮物語　原田重久　谷保天満宮社務所　１９９２年,(2005 年改訂 9 版)［１０／Ｄ９］
29）多摩の歴史（３）　郷土士刊行会　昭和５０（１９９５）年　［０２／Ｂ１］、（Ｋ２９１）
30）古書にみる国立
-1　江戸名所図会　上記　19)
-2　武蔵名勝図会　植田孟縉、片山迪夫、慶友社、1993 年　P609　　［０２／Ｃ６］
-3　法然上人行状伝記日本絵巻大成　法然上人絵伝　小松茂彦　中央公論　1981 年［７２／２］
-4、新編武蔵風土記稿　　［０２／Ｃ６］
31）東京歴史散歩　東京歴史散歩編集委員会　　［０１／Ｃ２］
32）都神社名鑑　　下巻　　［０１／Ｄ９］
33）谷保の城山の四季　谷保の城山ふれあいボランティア　平成 14(2003)年　［１０／Ｑ７］
34）東京湧水探訪　百瀬千秋　けやき出版　1995 年　［０１／Ｃ２］
P66 に谷保天満,常磐の清水　P70 に矢川,ママ下湧水　紹介記事あり
35）法然上人をめぐる関東武者３　津戸三郎為守　梶村昇　東方出版　2000 年　［２８９／つ］
36）わたしたちの町　くにたち　郵政国立研究会/編著　ぎょうせい　1987 年　［－］、（２９１）
37）こども風土記　国立むかしむかし　原文 : 原田重久、監修 : 水野祐　くにたち中央図書館　　１９８１年　［１０／Ｂ１］、（Ｋ２１９）
38）くにたちに時はながれて　志田次子　自家出版　1987 年　　［１０／Ｙ３］、（ＫＳ３１８）
39）武蔵野歴史地理　第７冊　高橋源一郎編　有峰書店　［Ｑ２／Ｂ１］，（２９１）
城山、板碑　三田氏について記載
40）わが町　山口瞳　１９６８年　新潮社　［１０／Ｙ２］
41）近松全集第１巻　「津戸三郎」　近松全集刊行会　緑川亨１９８５年　岩波書店
元録２年５月　竹本座で上演された浄瑠璃
42）わたしたちの国立　社会科副読本改訂委員会　１９９５年　国立市教育委員会　［１０／Ｂ１］
43）朝日新聞　2008 年 8 月 2 日　朝刊　多摩版
44）日本くるま意外史　2004 年 4 月　トヨタ博物館発行　［５３７］
45）石仏を楽しむ　国立編　獅子宿の碑　石川博司編　１９８６年　ともしびの会　［Ｄ１］
46）国立の生活誌　Ⅱ　佐藤彦一家の暮らし　国立市教育委員会　1985 年　［Ｄ１］
47）くにたちの年中行事　四季の祈り　秋から冬へ　くにたち郷土博物館　2003 年　［１０／Ｄ４］
48）谷保の水車　記録する会　国立市公民館　１９８６年　［Ｃ７］
49）わが国初の自動車（タクリー号）「遠乗会」１００周年　パンフレット　谷保天満宮、国立観光まちづくり協会　２００８年８月発行　［５３７］

謝意

本資料の作成にあたり、谷保天満宮　権禰宜　菊地　茂　さん　より　第１章の谷保天満宮をはじめ、谷保天満宮、津戸三郎為守などについて、貴重な知見と助言、資料の提供を頂きました。深くお礼を申し上げます。